

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

【氏名】竹田恵子

【所属】(助成決定時)お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科博士後期課程／
早稲田大学演劇博物館 GOE 研究生【研究題目】日本における HIV/AIDS をめぐる「表象戦略」に関する研究
—ダムタイプによるパフォーマンス「S/N」(初演 1994 年)を事例として

【研究の目的】

本研究の企図は、日本における HIV/AIDS に関する「表象戦略 Representational Strategies」がどのように用いられ、HIV/AIDS の支配的言説や行政・法制度等の社会的文脈に対してどのように影響を与え、相互作用をなしていたか分析することにある。ここでいう「表象戦略」とは表象それ自体だけではなく、従事者による広義の社会制度への交渉など広い文脈から行う介入的効果という意味を持つ。本研究ではとくに世界的に評価の高い芸術家集団「ダムタイプ」によるパフォーマンス作品「S/N(エス エヌ)」(初演 1994 年)を事例とする。「S/N」は 1992 年に「ダムタイプ」の中心人物であった古橋悌二(Furuhashi, Teiji 1960-1995)が感染の事実を友人らに知らせたことに影響を受けて創作された。そしてその周囲(京阪神圏)では HIV/AIDS をめぐる様々な市民活動が起こった。そして 1998 年から古橋の友人らと行政、研究者、ボランティア・セクターが協働関係を結び、HIV/AIDS 関連団体を立ちあげ、HIV 感染対策に効果を挙げている。

【研究の内容・方法】

〈研究 1〉では世界的に評価の高いパフォーマンス「S/N」を、米国を中心とした 1980-90 年代前半の「表象戦略」に位置づけ、その特性と一般性について論じる。とくに、古橋悌二と交流のあった米国のエイズ・アクティビズム団体「アクト・アップ ACT UP (the AIDS Coalition to Unleash Power)」の類縁団体「グラン・フュリー Gran Fury」による作品と比較行い、「S/N」の特性と一般性を検討した。2011 年 6 月 23 日から 7 月 6 日にかけて USA, ニューヨークの New York Public Library for the Performing Arts(Dorothy and Lewis B. Cullman Center), Billy Rose Theatre Division および New York Public Library 本館の Manuscripts & Archives Division にて「グラン・フュリー」やその他のエイズ・アクティビズム団体に関する資料調査を行った。資料には書籍、VHS、書類、書簡、新聞記事が含まれている。また、京阪神圏において「S/N」創作過程に関するインタビューも併せて行った。

〈研究 2〉では、HIV/AIDS をめぐる言説の時系列変化や政治・法体制と関連させ、当該市民活動からどのように行政・研究者やボランティア・セクターとの協働体制が成立し、その要因にどのように「表象戦略」としての「S/N」が関わっているのか検証することにより、芸術と社会的文脈の相互作用について明らかにした。2011 年 4 月 13 日から 14 日、5 月 5 日から 7 日にかけて、インタビュー調査および資料調査を行った。資料には、古橋悌二の HIV 感染告知が契機となって起こった市民活動のリーフレット、ミーティングノート、出版、「S/N」批評記事、写真が含まれている。

【結論・考察】

〈研究 1〉「S/N」は少なくとも 9 つの過去の他者の芸術作品を引用・改変して引用しており、「グラン・フュリー」もその点では共通している。「グラン・フュリー」はグラフィックスに写真を組み合わせた作品を多く創作しており、そのスタイルは過去

の芸術家のそれに類似している。ただし HIV/AIDS に関するメッセージを広く届けるために、著名な芸術家の作品を模しており、その創作過程からも、特権的な近代的個人としての「作者」の主体は曖昧である。一方「S/N」においては、単に作品の創出に寄与した主体は複数であり拡散していながら、古橋悌二という特権的な近代的個人としての「作者」が存在したという両義的状态が明らかとなった。

〈研究 2〉当該市民活動の制度化は、研究者が市民活動の一部であったチャリティのクラブイベント「CLUB LUV+」に訪れたことが契機となっており(1994、5 年 詳細年不明)、直接的には「S/N」と関連しておらず、「S/N」周辺の公共的空間の重要性が明らかになった。しかし、当該市民活動では、各当事者が「主体化」しつつもアイデンティティ・ポリティクスに陥らないことが目指されており、「S/N」においてマイノリティが「カミングアウト」しつつも既存の言説編成に制限されない主体のありようを表象したことに共通性が見出される。強い主体化はともすれば当事者主義につながり、協働は難しくなるだろう。少なくともそれを避けるような表象の為され方がなされていたという点は明らかになった。